

# 青葉 繁れる

～井上ひさし氏を偲んで～

名掛丁東名会 梅津恵一

仙台にゆかりのある井上ひさしさんが亡くなられてから、早十五年が過ぎた。一年前の話で恐縮だが、井上さんが仙台一高に在学していた時代を描いた半自伝的小説『青葉繁れる』が映画化され、せんだいメディアテークでリバイバル上映されたのを見に出かけた。

私は以前からこの映画に特別な関心があった。というのは、私の親戚の E さんに聞いた話になっていたので。E さんは井上さんの仙台一高時代の親友であったが、卒業後、井上さんの新築祝いに呼ばれた際に、「あの小説に出てきたやつは誰がモデルか」と尋ねたところ、井上さんが「誰と誰とをミックスした創作だ」と話したそうだ。そのモデルがどのように映画に登場するのか興味があったのだ。

小説は井上さんが一高在学中の1950年から53年までの経験をもとに、戦後の進駐軍の統治下、日本一の名門校・日比谷高校から東北一の名門校・仙台一高に転校してきた渡部俊介が一高の落ちこぼれ4人組と巻き起こす、痛快明朗青春劇だった。それを1974年に岡本喜八監督が映画化したもので、その舞台となったのは井上さんの学生時代ではなく、なんと私が高校時代を送った時代の仙台だった。それに気が付いたのは、物語の中で彼らが女友達欲しさに二女高生に合同で演劇公演を申し込んでその打ち合わせをした時に、二女高生は制服を着ているのに一高生は私服だったからだ。当時は学生運動が盛んで、仙台一高と宮城一女高、そして私が通っていた仙台高校だけが制服を廃止して、私服通学が認められた時代だった。仙台一高と二女高があった連坊小路から仙台駅、青葉通り、仙山線、松島の五大堂と映画の舞台となった場所は、何処も私の高校時代の思い出が蘇る場所だった。また近隣の派出所やお店の看板、有名人の家の表札を盗んで自慢げに文化祭で展示するなど、映画の中の若者たちの突飛な行動は私たちが学生時代に体験したほろ苦い思い出と重なるものであり、映画を見た後に旧友と当時のことを酒でも飲みながら語り明かしたい衝動にかられた。

上映終了後、ホールの外で友人と立ち話をしていると、見知らぬ60代くらいの男性から声をかけられた。「映画を見ていたら方言がだいぶきついでしたが、あれは本当の仙台弁ですか？私は埼玉出身で宮城一女高出身の女房と結婚しましたが、彼女はこんなしゃべり方はしないのですが……。」と聞かれた。言われてみれば、映画では多少の誇張はあったが、高校時代には「何々だっちゃ」とか「何々だすべ」という言葉は確かに使っていた。私たちは一体何時ごろからこんな言葉を使わなくなってしまったのだろうか。

仙台市は統計によると年間の人口移動率の高さで、常に全国で上位にあるそうだ。会合で10人集まると仙台市生まれは2人か3人で、宮城県生まれと聞けば4人から5人程度、後の残りは県外出身者だそうだ。私が住んでいる駅東地区では仙台市の再開発事業後、旧住民の八割近くがこの街を去り、新しいマンションが乱立する移住者の町となってしまった。

市の教育委員会の依頼で、明治時代に仙台で生まれ育った私の大叔父と大叔母が会話したものが録音され、『仙台市史』の記録として残されている。テレビの普及が話し言葉を変えた大きな原因でもあるが、他所からの移住者で大都市となった仙台では映画に登場した人たちのような、昔ながらの懐かしい仙台弁を語る人たちは今ではもう消えてしまった。



【写真2点】梅津氏提供

## 井上ひさし

(いのうえ ひさし) 1934～2010

山形県生まれの作家。上智大学在学中より浅草の劇場でアルバイトを始め、やがて戯曲やシナリオを書くようになる。1964年から山元護久と共に連続人形劇「ひよっこりひょうたん島」の台本を手がけ一躍有名に。1972年、小説『手鎖心中』で直木賞を受賞。1983年こまつ座を創設し多数の戯曲作品を残した。

『ふるさと文学さんぽ 宮城』より  
(仙台文学館／監修 大和書房／発行)

### 【関連資料】

- 『青葉繁れる』井上 ひさし／著 文藝春秋 2008.1 Bイノ
- 『吉里吉里人 上中下』井上 ひさし／著 新潮社 1985.9 Bイノ
- 『仙台 本のはなし』仙台文学館 2010.12 S019セ
- 『仙台領に生きる郷土の偉人傳3』古田 義弘／編著 本の森 2022.2 S281フ
- 『仙台方言あそび』齋藤 武／著 金港堂出版部 2012.11 S818サ
- 『東北の作家たち』福武書店／編 福武書店 1984.8 S910ト
- 『ふるさと文学さんぽ 宮城』仙台文学館／監修 大和書房 2012.7 S918フ